

fate/SN—UBW— 無銘の英霊の受難

みやびやこ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある日呼ばれたら衛宮 士郎の兄として受肉していたアーチャー。どうか衛宮士郎更正プログラムを起動して聖杯戦争を生き抜こうとするが、そこは完全にアーチャーの知る聖杯戦争とは異なる代物へと成り果てていた。

これはところで転生というやつなんだろうか、ひよっとしてとアーチャーは渋い顔で今日も考えながら失った日常を謳歌するのだった。

SN完全にIFストーリーです。

もはや原型を留めていない説も濃厚。

目次

第一日目	状況把握	1
第二日目	不運	4
第三日目	神父……??	8
第四話	とうにずれた世界で	11
第五日	襲撃と名の見えぬ騎乗手	13

第一日目 状況把握

地獄の底で息を吐いた。

現状を変える方法があるのなら、誰か教えてほしい位だ。燃え盛る都市に名残はない。懐かしむものはない。彼は涙を溢した。もしも、己が二人、いや、四人いたのなら。この喜劇にも似た悲劇を止める方法があったんじゃないのだろうか。

黒い天の穴、ヘブンズホールから降りてきた手が正義を志す己に問い掛ける。

お前はそれを願うのかと。

少年はようやく笑みを浮かべたのだった。

「ああ、願うさ」

全てを失って、尚。

全てを救いたいと。

雀の声で目を覚ました。赤褐色の肌の同い年の少年がこちらを覗いている。

「……」

「……貴様、またらくでもないことを願ったな」

その少年の言葉に衛宮 士郎は見に覚えもなくただただ首を傾げたのだった。

「……ふん、忘れたふりか。まあいい。どうせ、貴様が忘れていないことくらい把握済みだ」

このやたらイライラする子供は何なんだろうか。

「……………お前は、誰、だ？」

その言葉に子供はようやく、本気で落胆したように見えた。そして、自分の顔を見て何かを納得したらしい。溜め息を着く。

「……………今までの押し問答は忘れてくれ。悪かった。人違いをしたよ。あー……………」

その悩み声にようやくだんだんと意識がハッキリしていく。ああ、そうか。彼は自分の兄だ。

何故こんな大切なことを忘れていたのだろうか。

「兄さん、それで何か用かな？」

兄さんと呼んだときに苦虫を挿り潰したかのような顔を兄がしたのを衛宮 士郎は見逃さなかった。だがその顔が今日見たばかりの物ではなかったので尚更首を傾げた。兄は愛想のいい人だ。

「……何でもない、士郎。食事だ」

その言葉に衛宮 士郎は矢張り違和感を感じる。この家に自分以外に調理のできる人間はいただろうか。

「まー、やっぱりアーチャーくんったら料理上手いわよねー」

藤ねえの猫撫声に士郎は苦笑した。

「それほどでもねえよ、藤ねえ」

それに、何だか兄のことを褒められるのは癪だった。兄が嫌いと言う訳ではないのに。頭が痛い。頭痛がする。士郎が頭を抱える様子をアーチャーは冷たい目で見つめていたのだった。

喚ばれた。

明確な意思をもってそれを体感し、己を呼ぶ細い糸を無理矢理手繰り寄せたのは座に帰ってすぐの事だった。

聖杯戦争の終わりを見届け、皮肉にもオレは自分殺しをしくじつた。それでも、答えは得たと。得るべき事があつたと思つた。だからこそこの帰還だった。そして帰還直後のヤル気満々な召喚の出端が挫かれたとは正しくこの事だった。

目の前に転がる衛宮 士郎の幸せそうな寝顔にたぎる殺意を抑えるので精一杯。何故か小さな器に閉じ込められてその不満を抑えるので精一杯。意味も理由も分からない召喚のせいで四六時中イライラする。

その時だった。事情を知りそうな目の前のクズが目を覚ましたのでついつい通気揚々と畳み掛けてしまった。

「……貴様、またろくでもないことを願つたな」

こう言つた理由は簡単で、この時空での聖杯戦争は完結していて然るべきだと私の直感が告げていた。それならばやらかしたのは凜か

コイツだ。凜の方なら私が呼ばれる道理が分からない上にここにいたのだから理由は百発百中コイツなんだろう。

だが目の前の男は小さく首を傾げるだけだった。

「……ふん、忘れたふりか。まあいい。どうせ、貴様が忘れていないことくらい把握済みだ」

こちらは完全に出任させたつた。ついつい口先から嫌味が衝いて出てしまう。

「……お前、誰、だ？」

その言葉に立てていた虚勢が崩される。誰だ。誰だと来たか。それならば、ああ、なるほど。忘れていいのか。その後、目の前の衛宮士郎と二三言交わし蔵から出る。その後の応答でわかったこと。それは

ここでオレは衛宮 アーチャーという戸籍を持っているただの人間で、切嗣に士郎と共に拾われた誕生日が士郎より少し早いだけの……人間。

アーチャーという名前に関しては自分でももつと上手いやり方があったんじゃないのだろうか、と吐息を吐く。そして、何より明確な違和感があった。

霊基の欠落。座にある本体との接続が切れているという事だ。それから、オレ自身の能力の弱体化。これから分かることはつまり、
「……もう一人オレが召喚されている」

だが、クラス違いでなければ同じ英霊の召喚などできないはずだ。そして、オレにはアーチャー以外の適正クラス等無い。あつたとしてもキヤスターだが、意図的に呼ぶのはほとんど不可能だ。何せオレは未来の英霊。

とりあえず、と思考を中断する。こうなつたのなら、もう完全に士郎を、弟分となつた己の過去の姿をどうにか勝ち残らせるなり負かせるなりして、その人格に矯正を加えよう。

今からなら矯正も間に合うはずだ、と希望的観測に言葉を濁しながらもこの世界での暮らしが幕を開けたのだった。

第二日目 不運

何故こんなことになったのかも分からないので大人しく学校へと向かう。

「アーチャーは進路どうすることにしたんだ？」

訊ねてきたソイツを睨もうとして止めた。少なくとも記憶にない今まで通りを演じるのならばこの嫌悪感はどうにかしなければならぬ。

「……決まっていない」

「ふーん、藤ねえに怒られるぞ？」

一瞬、彼女の怒る姿が目の裏に浮かんで吹き出しそうになった。あまりの懐かしさに泣きたくもなる。

「衛宮くん、おはよう」

声をかけられたのに無視するエミヤ シロウに首を傾げる。こいつはそう言うことをするような

「あんたよあんた！アーチャー！」

……私だった。

思わず取り乱した凜の方を振り替える。

「ああ、すまない。少し考え事をしていた。おはよう、凜」

今度はエミヤシロウが吹き出した。……なんだ、失礼すぎないか、コイツら。

「ちよつ、あ、アーチャー？な、なんで急に呼び捨てなのかしら」
……。

拜啓 昨日までの私。

貴様のせいでやりにくい。

己殺しの対象が増えた所で学校に辿り着いた。

「じゃあ衛宮くん、 士郎。またね」

「うん、また遠坂」

私は何も言わずにげんなりとした気持ちで手を振った。なんだろ

う。今更記憶喪失とかそういう設定にしたい気分になってきた。いや、そんなことを言っている訳には行かないんだ。

「どうしたんだよ。朝からちよつと調子悪くないか」

「……貴様の癖に鋭いな」

やや八つ当りの的にそう言つて席に座った。

「よう、アーチャー」

ツ……次から次へと面倒なのがゾロゾロと。

机の前に立つ慎二（確かそんな名前だった）に溜まり始めていた苛立ちと殺意が爆発しそうになる。

「なんだよ、無視かあ？相変わらず連れないなあ、ウンヌンカンヌンソ
ンナカンジデワカメワカメワカメワカメワカメワカメワカメワカメ
ワカメワカメ……」

話が長かった。普段ならもう少し冷静だったかもしれないが、今のオレは苛立つていた。

「お前みたいなのがいるからエミヤシロウが面倒になるんだろうがああああああ!!」

……暴力は良くなかった。反省している。

「どうしたんだ、アーチャー。普段はあれくらい無視して流せるだろう」

一成の言葉に黙る。彼なら何を話しても受け止めてくれそうな予感がするがさすがに話すわけにはいかない。

「……話せない、か。それなら別に良い。俺も普段から間桐には少しばかり、な」

濁された言葉。まあ別にアイツが悪いやつと言う訳では無いのだろう。それは、ぼんやりと前世の記憶からも読み取れる。最も、ほとんど覚えていないが。

「……すまん、一成」

「いや、いいさ。ほれ、手当ては終わった。痛いところはないか」
「平気だ」

あちこちの痣に貼った湿布に苦笑する。我ながらよくやったものだ。だがその対価も決して安い物ではない。

まさか自分が冬木で穏やかに暮らせるなどと誰が予測しただろうか。……だからこそ。この聖杯戦争はきつと凄惨な結末を迎える。誰も幸福になれないような、な。

「アーチャー。鞆と、これ、鍵」

「助かる。では士郎。先に帰っている」

「ん、リョーカイ。俺は一成のこと手伝ってから帰るから。晩飯は任せた」

私は鞆と鍵をもって商店街へと足を向かわせたのだった。

日本 冬木市。

駅前にある大きな観光ホテルの前で一人の男が職員に罵倒をしていた。

「ふざけるなあー!!離せアル!!予約していたのに止まらせてくれねえとはどーいう見だこのクソヤロウ!!」

「申し訳ございません。ですがセレンス様名義でもアルフ様名義でも予約は入っていないので……」

「ふざけんな!!どうすんだよ!こちとらわざわざイギリスからお前達の生活を助けるために来たっていうのによお!!」

「まあまあ、落ち着けよ、エディ。そんな風に暴れても仕方無いから……」

どちらかと言えば困っているのは職員だ。仕方無い。太刀打ちに向かうか、と買い物袋をぶら下げたままホテルの方へと踏み出す。すると、奥から黒髪のセーラー服の少女が現れた。

「エディったらおーとなーげない!良いじゃない、私、野宿つての気になるわよっ!」

「……はい、エドワードさん。そこまで私達に気を使わなくて大丈夫

ですよ」

女性二人の意見に、白髪の神父らしき人物は一気に大人しくなる。「……せめてこいつらだけでも泊めてもらえないのか？女性の野宿つてのはあんまり賛成できない」

「申し訳ございません……当ホテルは今、空きが」

うん、今だな。

とぼとぼとホテルから歩き出す彼等にやや駆け足で近寄る。

「あー、そこのお兄さん？白髪の？」

そう呼ぶと先程の白髪のお兄さんはこちらを向いた。胸のところかけられた十字架。うん。やっぱり神父だな。

「さっきのやりとり見てただけどき、泊まるどころ無いんだって？」

その言葉に神父は少し考える。

「ああ、無いな。この町の教会は諸事情により泊まりたくないし今夜はこのままだと俺達は確実に野宿だが、それがどうした？」

「うん、兄さん達が良いならウチに来なよ。まあ、アーチャーがそれを許すかは聞いてみないとわかんねえけど……多分、連れてけば許されると思うな」

神父達はお互いに目を会わせる。その時だった。

「兄さん達ラツキーだな！士郎の坊主のところに泊めてもらえるなんて」

「士郎ちゃんったら本当にお人好しね」

神父はその言葉に何かを察したのか、先程までとは違い、穏やかな笑みを浮かべた。

「成る程ね。じゃあ、世話になろうか、少年。俺の名前はエドワード・セレンス。しがない神父だ。こちらはアルフ、ノエル、アリシア。同僚なんだ。よろしく」

彼の手を握る。

「はい、俺は衛宮、衛宮士郎です。エドワードさん、よろしく」

第三日目 神父……??

「ただいま」

揚げ物をしていると帰ってきた声がした。

「大丈夫だったか、アーチャー」

「……たわけ。買い物はオレもした」

その言葉に士郎は苦笑いを浮かべたのだった。天婦羅を揚げてめんつゆを

「おせわになりまあす」

「……」

ナンカイタ。

「……エミヤシロウ。ソイツらは何者だ」

「……おおよそ事情は理解した。初めまして、衛宮 アーチャーだ。君たちは離れを使うと良い」

天婦羅を出したため息をつく。頭が痛い話ではある。

「んー、兄ちゃん料理うまいのな」

「勝手に食べるな!!」

白髪の神父、エドワルドは天婦羅を頬張りながら豪快に笑った。この人本当に神父なのか？

「いやー、実のところ冬木の神父が死んでこっちに回されたときは己の不運を嘆いたものだが案外悪くもないものだな」

「死んだ……?」

「おう。冬木を担当していた神父が死んで俺はこっちに回されたの。で、そんときにシスター二人とこの馬鹿をつれてきたんだよ。よろしく」

言峰が死んだ、のか。

次の日もほとんど今日と似かよっていた。違ったのは一つ。オレは熱を出して学校を休んだ。久しぶりの熱に慣れず動きにくい。英

霊になってからはこんな風に熱が出ることも無かった。いや、無いに決まっている。

だるいし、心細い。

……いや、心細いなどと。

眠れば夢を見る。赤く燃え盛る冬木の事を思い出す。それから溢れる黒い聖杯の泥が体を焼く。あれは……。

ガシャンツツ

物音で目を覚ました。体はすっかり軽くなっている。喚んでいる。英霊としての私が呼ばれている。

「……英霊として、その呼び声に答えよう」

令呪の細い糸を辿り、私は

「……蔵」

「アーチャー……!?!」

私は即座に魔力を回す。呪文を叫んで、やってきた蒼い全身タイツに短刀を刺した。

「ルール・ブレイカー!!」

魔力を根刮ぎ持つていかれた感覚にぐったりとする。

「ツ……てめえ何した」

「貴様の令呪を、解除した」

その言葉に彼は目を見開く。これでバックアップが無くなれば弱体化した私とて

「テメエ、アーチャーか」

その言葉にぴたりとオレの動きが止まる。こう言うときに言うのは、ええと、ああ。

「気がつくのが遅いわ、たわけ」

オレの苦情にランサーが平謝りをしたのを聞き届けて体を起こそうとしたが、持っていかれた魔力が大きすぎたらしい。上手く起き上がれずに倒れこんだ。

「……取り合えずあの嬢ちゃんが追ってきてるしオレが処分してくる

わ

「それなら誰かと契約を……」

じとつとランサーがオレと士郎を見比べる。何だ、何かあったのか……??

「坊主にはアーチャーの令呪がある。んで、アーチャーがフリー……ならオレはアーチャーと契約するか」

……。

むう、それが矢張りどう考えても最適解になるな。私と士郎が契約を切つても私は現界できるのだがそれだと私の魔力が持たない。嫌ではあるが衛宮 士郎とパスを結ばれている今はどうやら投影ラックも一旦戻る様だし。

「……ではそうするか」

「心底嫌そうに言うんじゃない。オレだって坊主とか嬢ちゃんの方が断然良いわ」

「はっ、外れ籤ザマア」

「……お前な」

おっと、口が悪くなってしまったぞ。

第四話 とうにずれた世界で

「ふーん、お前、今サーヴァントじゃねえのか」

……遠坂凛を家に招き入れてのお茶会でランサーはポツリと感想を漏らした。

「えっと、じゃあ元はアーチャーは、サーヴァント、なの？」

「……ああ。この聖杯戦争をどうにか戦い抜いたこともある、はずだ」
その言葉に彼女は首を傾げる。

「でもそうならどうして貴方は衛宮くんのお兄さんとして生活しているのかしら」

そこなんだよな……。

そこ。そこなんだ。オレが今回の聖杯戦争で突っ掛かっているのは。

オレはサーヴァントでは無かったのか。

サーヴァントで無いとしたら、この体は、この記憶は何なのか。いつからここにいるのか。

何故、ここにいるのか

「……で、ランサーは私のコトを覚えているのか」

「臆気ながらな。テメエとは腐れ縁みてえのがあつたからな。そう言う意味では、確かにこの聖杯戦争は普通のモンとはちげえな」

ランサーの言葉に唸る。

「……聖杯、戦争……」

衛宮 士郎は分かかってないのか、首を斜めに傾げたのだった。いや、分かかっていないだろうな。何も教えてないからな。

「まあアーチャーが分かかってるならいいか。うん」

こいつなあ……。

「まあ、でも衛宮くん達がマスターならいつか」

「……ところで、彼が君のサーヴァントなのかね？」

凛の後ろに立つ人物……見るからに薄幸の青年はこちらを見ると何故か微笑んできた。

「カルデア以来だな」

……。

白髪に薄幸の青年の笑みに思考を巡らせる。

「君、カル……か」

「ああ、そういう君はアーチャー……オレと同じクラスか。よろしくな」

何とか思い出せたことに安堵の息を漏らした。

「……………おお、お前か！カル」

ランサーの頭をひっぱたいて打ち緒とした。黙れ、と言う意味を込めて。いやむしろ黙ってくれ。黙ってほしい。

「なら二人は聖杯戦争の監督役に」

「あ、いや、その必要はねえよ、遠坂の嬢ちゃん。始めまして。オレはエドワルド。此度の聖杯戦争の監督役なんだ、よろしくな……例え過去の監督役がしようと、今回はオレだから。よろしく」

その言葉に凜は顔を歪めた。当たり前だ。彼女からしてみれば監督役とは言峰なのだから。

「……………わかったわ、よろしく」

「……例えこの聖杯戦争が幾ら歪んでいようと、

オレは公平にして公正な判決を下すことを心掛けてる。その辺には理解がほしいな」

こうして一夜目がようやく過ぎたのだった。

「…………マスター。体の具合は大丈夫でしょうか」

月光そのものを束ねたような金髪が揺れる。彼女は闇の中の痩せ細った人物に言葉をかけた。

「うん、大丈夫だよ、マスター。言峰神父も……アイツも、俺に期待してくれてるんだ。俺が、頑張らなくちゃ、だよな」

その問いに彼女は答えない。心を殺すまでだ。例え如何なる結末を招こうと、彼を守るだけ。

第五日 襲撃と名の見えぬ騎乗手

「……シロウ。私……オレは蔵で鍛練をしてくるが」

「それなら、オレは先に寝てる。何かあったらランサーに頼むからさ」
……ようやく一人の時間が持てた。

朝からずっと隠してきたぶん、やりにくかったし。とりあえずは、町を散歩してあれを探しに行ってみるか。

イリヤスフイールとバーサーカー。

あれがこの家を襲撃する可能性を減らしておきたい。

門から外へと出ようとした時だった。リリン、と鈴の音がする。この方向は……。

「ちっ」

舌打ちして武装をしながら走り出す。そして、あの木偶の坊の寝室に窓を割りながら入った。

月光がその人物を浮かび上がらせる。

砂漠で見た、キャラバンなどが着けていた帽子で目元を隠している。髪も完全に覆われている。ただ、褐色の良い肌に赤い線が入っているところが伺えた。

「……う………貴様、何者だ」

その手に握られているのはゲイ・ボルグだ。固く握られている。

「………」

返答はない。良く見れば首に固く縄が結ばれていた。彼はゲイ・ボルグをしまい、立ち上がる。

「見られたか。まあいいさ。顔までは見えまい」

くぐもった声だ。口許に何かを巻いているわけでもないのに、そのくぐもった声は不自然に響く。

「……オレは、サーヴァント・ルーラー。と言ってもこの霊基は仮初めのものだが。どうだつていいさ、そんなのとは。だが戦力を削ぐのに失敗したとなれば話は別だ。……あんたを殺すことで釣り合いをつけるのでしょうかね」

不味い。

「トレース……!!」

「はいはい」

明るい声音が響く。

「おにーさん、ちよつと退いてねー。引いちゃうとお、後味悪いからねー!」

私が入ってきた窓から一人の少女と巨大な白狼が現れた。

「あつはっはー。お兄さん、危ないって言ったじゃないか。もう、退いてくれないと殺しちゃうよって! まあでもそれはそれとしてさ。この人魔術師なんだよね、それなら殺されるのは可哀想だし。このサーヴァント・ライダーがお手伝いしてあげちゃう……かもお?」

ライダー……??

白狼はため息をつくようにがっくりと頭を下げた。

「あはは。私達、ホンモノじゃないから、大変だよねー。他のサーヴァントと渡り合うのー。トウウンも疲れるよねー。私いー? 私はあ、疲れたかも。えへへへへ」

白狼の頭をぽんぽんと叩いた巫女はそれから少し考えるふりをしてからニカツ!と威勢よく微笑んだのだった。

「ルーラーのお兄さん、こんばんはー! 昨日ぶりだね、うふふふ、じゃあこんなバカのふりは止めるよ。ねえ、死んでくんない?」

狼はその口を大きく開いたのだった。そして、

「なあんてね!」

少女が刀を抜刀したのだった。ルーラーの姿は消える。少女はちえ、と舌打ちをして、床に足をつけたのだった。

「トウウン。もういいよ、ごめんねー。探索に付き合わせちゃって」

その瞬間、白狼は人間へと姿を変えたのだった。